

【燐・十六】

あまりにも信じられない展開がひろげられたので燐は雪男の頬か手を抓りたかったのだが、そこは血のつながりというべきか、雪男は首を捻って無表情な顔のまま燐の頬に手を伸ばすと、思い切り抓っていた。

「いつてえ！」

「…兄さん、本物だよね？」

ざりざりと抓ったままがしつと掴んで離させてから俺は俺だメガネ、と怒鳴った。それでも雪男はショックを隠しきれておらず、洗面を作り考え込んでいる。弟なりに納得がいく答えが出せないよとこの状況にいる資格でもないよとでも決めつけているかのようだ。

「リボーン、あのさあ…」

先ほど見たときと同じ位置に同じ髪色、似たような雰囲気青年が立っている。白いスーツはこれからどこかの式典でも行くのかという風にも見えるが、制服みたいに普段から着ている風にも見える。シャツは黒、鈍い赤銅色のネクタイとで浮かないくらいによく似合っている。年齢は二十代半ばくらいだろうが、ぼんつと空気を裂くような音でそっくりながら煙が立ったと思ったら彼が立っていた、まるでそっくりな兄貴と入れ替えたみたいだな。そしてもう一人、敵意だだ漏れれれと睨み合っていた相手が青年と向き合うような場所に立っている、これまた黒いスーツに細いネクタイとこっちは要人警護のSPといった感じだ。

ただ問題は、彼らが煙だかを浴びた瞬間に年齢を引き上げってしまったことだ。玉手箱か。そんなものが転がっていないけどそんなまやかしの術なんだか呪いだか聞いたこともない。先ほどあった姿にその面影を残してはいるが、同い年とは言えない、背

も高くなっていればどこからどう見ても成人した、二十代半ばくらいの姿になっている。

と、いうか、煙が晴れたと思ったたらSPの手が腰に回り、二人が抱き合っているような格好で立っていた。相手もそうされることにまんざらじゃない、寧ろ日常的にあるような顔をしている。

「こんなタイムミングでそんなアイテム使うなよ」

「お前らお楽しみどころだったのかよ」

歩行を覚えてばかりの乳幼児といった姿なのにスーツを着て人とは思えないオーラを放ちまくっている謎の赤ん坊の問いかけに違うよ、と少し赤くなりながらも真つ向から否定する。文句を言っているが彼は本気で怒っているわけではない、燐はお楽しみってそういうことか？ と年並みの好奇心を持って思う。

「これから会議なんだよ」

「行きたがってなかっただろ」

「……」

凶星のようでSPの短くも鋭いツツコミに青年は気まずい顔になる。

いや、そうじゃない。

燐は首を横に振ってから黙って後ろで腕を組んで見ていた。シユラを振り返る、シユラもすげー仕掛け見たと言いたげで半分興奮、もう半分は驚いたような顔をしている。

赤ん坊はシユラや燐達を見ると、中折れ帽を軽く摘み上げるようにして同社雑誌のよしみということ、とまず、言う。

「まあ、イリユージョンとでも思ってくれ、夢のコラボというやつだ。設定はなるべくして柔軟に変化する。誰が参加してくるかわかんねーぞ」

「マジで？」

やや仰け反ったように白い方のスーツの青年が言い、もう一人は無表情に腕を組んだだけだった。

「参加？」

雪男は考えすぎてだろう、横で無言のまま無表情がどんどん思ひ詰めた顔になっていく。燐と同じくぼかんと見物しつつ、実はしゃかりきに頭脳を動かしていたのだろうが、燐が何を考えているんだと訊いたところではぐらかされるだけに決まっている、よりによってヴァチカンに呼び出されるなんてと、首根っこを掴んでいる間も余裕がなくカリカリしていた。

「雪男」

燐はシユラを巻き込んで赤ん坊と話している青年達を見ながら口を開いた。

「お前はお前のことだけ考えてろ」

「……」無理という顔だ。

頑固というか、強情というか。もうちよつと兄を信頼しろよと言いたくなるのを堪えながら手を伸ばし、ぐしゃぐしゃと雪男の頭を撫でた。雪男は続げようとはさせず、燐の腕を掴んだ。困惑と苦悩が混じったような顔をしている。

「……だって、ありえないし、意味が分からないだろ。どうしてこんなことになっちゃってんのさ」兄さん、説明してよ。

低く押し殺したような声、この態度は明らかに逆上だ。さらかて理解の範囲も広い弟だが流石に得体知れない連中に、さらに彼らがかくす信じられないようなことに状況の整理と判断が追いつかなくて、どうにもならなくなつたのだろう、結果、燐に八つ当たりしている。要するに許容を超えたということだ、燐なんかもうとくに『なにこれどういうこと？』を投げ出ししている。これがバカになる方とならない方の差かよ、と小さく舌打ちが出てしまう。

「俺たちのせいじゃねーだろ」つか知るか。

雪男が力を込めて燐の手を離させようとするから燐もムキになる、黙って宥められてろ、バカ。

「素直になれ」

「そういう問題じゃない、どう納得しろっていうんだ」

「~~~~」

焦れたいというか、かわいげねえつつうか……。

「ごっ。」

顔が近いついでに頭突きしてやった。雪男は小さく呻く。

「痛いな」何すんだ！

「うっせ、頭冷やせ」

「おい、ミスターネガティブシンキング」

「は？ 誰？」

「ウゼエ」

「っ!？」

「ごすつと一撃が雪男に入る。目の前をなんか走つたとは思つたが雪男の上半が軽く吹っ飛ばされたのに気付いた時点で自分の反応は遅すぎた。雪男の身体が撓つて二、三歩後退したと思つたと崩れ、ぱたりとまるで羽毛かのように石畳にすつと落ちたのはスリッパだった。」

「雪男おおお!？」

燐は頭突きの痛みだけだったが、雪男はプラススリッパの二段だ。ていうかどうしてスリッパが出てくるんだ、しかも音と反りつぷりに尋常じゃない重さを見たと思う。思わずきゅつと肝が冷える。

「リボン！」

白スーツが悲鳴のような声を上げて雪男に駆け寄ってきた、すみません、すみません、とシユラを見て米つきバツタのように詫びを繰り返して、目を回してる雪男を抱えている燐にもほんとかめんさい、と心からの謝罪を口にし、心配そうに雪男の

顔を覗き込んでいる。

「手加減してたじやない」

「少しな」

S Pと赤ん坊は涼しい顔だ、シユラに至っては笑いを堪えているようでもある、おい、てめえ。憎々しく思いながら伸びている雪男を抱き起こした。雪男は何をするでもなく小さく呻くと目を開ける。

「平気か？」

「…びつくりした…軽いんだけど、なんていうか衝撃が」赤くなった額を撫でる。どこか釈然としないような顔をする。隣の顔を見ようとせぜず埃でも払う素振りをする。

「見せてみる！」

「いいよ、大げさだ」

「バカ、お前スリッパで吹っ飛んだんだぞ？ スリッパで！」

「スリッパ連呼しないでよ！」

とにかく雪男が頻りに避けまくるなか、兄として力尽くで額を見たり抓ったりしていると白スーツが割り込んでくる。

「あのー！ 大丈夫？」と心から心配し、気遣う声で聞くものだから燐は怒ることも出来ないし、雪男はなお都合の悪いような顔をする。

「…は？」

「ごめんなさい、びつくりしたと思います。オレ、上手く説明ができないんだけど、オレ達がここに来ちゃった時点でもうどうしようもないことになると思うから、それは受け止めて欲しいんだ」

「……」

これが真面目だ、組手の途中みたいな格好のまま雪男と顔を見合わせる。相手は同じ迷惑に遭遇してしまっただひとみたく

弱く笑う。少なくとも燐には嘘を吐いているようには見ええず、違うのはこんな迷惑に慣れているといった経験からくる僅かな余裕っぷりだけだった。雪男のように逆ギレもしないし、燐みたいに投げ出してもない、さて困ったぞ、と後をきちゃんと対処しようとしている冷静さが大人だと思う。

「オレは沢田綱吉、ツナって呼ばれます。あつちの赤ん坊はリボンで、腕組んで立っているのが雲雀恭弥さん。えっと、確か、奥村雪男さんと燐さん…だったよね？」

「あ、はい」

雪男は素直に応じ、燐はちよつとだけ警戒を解いて相手を見る。まだ話が分かりそうで、害意のないふわっとした感じもしたからだ。相手は軽く瞬きをすると苦がるような顔をする。

「血だ…」

「え？」

雪男が慌てて額を触ろうとするのを、止め、ぎつと額に顔を寄せる。雪男は痛がるのと迷惑がったが、滲んできた血が許せなくもあり、咄嗟に舐め取った。スリッパについた砂粒か端っこで引つ掻き傷ができたようだ、だってそれしか燐は他に知らない、でも今頃に血つて、要するに…あれ？

「ちよ、兄さん」

「消毒！ だつて、異常に速かつたつてことだろ、そんな、お前…」人なのに！

どうしよう、どうすりゃいいんだ？

「その言い方やめてくれる？」

雪男は明らかに怒気を含ませた声を出す、擦過傷でも怪我の方が遅いっておかしい、どんなに優れたツッコミマスターだってそんな芸当は出来ないだろう、もはや普通のスリッパ、いや、普通の奴じゃない。そもそも悪魔をまるで寄せ付けないし。シユラを見たがやつちやつたという顔で状況にはノーコメントらし

く、燐はツナを睨んだ。

悪魔以外の奴か？ それともやつぱり高速スリッパなのか？
ナニモンだよ、コイツら……」

「や、いや……」

黙っていたS……じゃなくてヒバリキョーヤがいつの間にか来ていてツナの腕を掴んだ。動く気配がまるで感じられなかった。ぶわつと殺気が放たれて、身体が緊張する、敵意も何もへし折られて雪男とて思わず唾を飲み込んでしまった。

「ねえ」

ツナだけがどこ吹く風とばかりにそれを受け流していた。尊敬したいほどの鈍さなのかそれとも分かたてて無視しているの
か知りたい。

「何ですか、ヒバ……」

相手の腰を抱きよせたかと思うときほどの続きとばかりに口づける。こんなとこでチューかよ、と拍子抜けて言いたくなるが、罨かもしれない。それにしてはされた方の顔はぼかんと
しすぎているけど。

「あの、意味が分かんないんですけど、ヒバリさん……」
何気なく非道い。

「挨拶」

言われて納得した顔をする。相手がオカマ幽霊ゴーストでもこういう反応をするのだろうか、何となくしそうな気がする。どこか中性的で、柔らかな感じのする青年は飛び抜けて美形だとかではないのにどこか清潔で、親切そうに優しげ、でも危なっかしさもあって彼丸ごとが掏摸被害に遭いそうでもある。だからこれは自分のなのだというアピールなのだと思う、この二人ってそういう仲なのか、と頷く一方で、なんか微妙に認識みたいなものが互いにズレてそうな感じもしないでもない。雪男は無表情に大人カッパルを見ながらも手には拳が握られていた。分かな

い、面倒そう、煩わしい、すぐに片付けてやる、とそんな気持ち
を腹の中でまぜこぜにしているんじゃないか。
「……」

燐は雪男を見る、なんなんだよ、こいつらと目で問うてみた
けど雪男には通じないらしく、通じたとしても答えられないよ
うに見えた。少なくとも雪男は燐と同じくらいに現状について
情報を持っていない。

「兄さん、平気だから離して」

気が許せないけど渋々離す、色んな意味で心配だったけど雪
男は燐の言葉で先刻は怒ってしまったし、これで聞かなかつた
らきつと口も利いてもらえない。雪男はムツツリだから怒りも
粘着質なのだ。ねちこく攻撃されるのは嫌だ。傷を見ると腫れ
てもおらずうつすらと引つ掻いたような線が見えるだけだった。

「雲雀さん、と、沢田さん……」

「ツ、ツナでいいよ、宜しく」
顔を掻くようにしてちよつと緩んだ顔つきをはつと戻してか
ら、ツナは雪男を見た。平然としているのはリポーンとヒバリ
と雪男だけでシユラと燐がチューシーンの中に入っておかれた
ような感じだ。ドラマか映画の中ですかこは、とシユラも思っ
ているに違いない。……って、シユラがそもそもこんなとこに呼
び出して何かしようとしてるんじゃないか？

「何だって僕は呼ばれたのさ、赤ん坊」

ヒバリキョーヤは『挨拶』を終えたらもう気が済んだのか、
興味を失ったようにさつさとツナから離れ、リポーンを向く。

「何か企んでるの？」

と雲雀が問うのをシユラが手を挙げ、「アタシが頼んだんで
す」と愛想を浮かべることもなく言った。

「……そう」

ちらりとシユラに向ける視線にはさきほどの殺気がまるで感

じられなかった。カリカリしている感じもないし、ユルすぎて
いるようでもない、淡泊で、言ってしまえば掴み所がない。

「……」

燐は腕を組む、睨み合ったくらいには意識し合っていたのにな。
このちぐはぐさがどうもしっくりこない。あの煙って何だったんだ？
やっぱ手の込んだマジックか？ ていうか、オレ、ナニユエわざわざ
ヴァチカン来てまでマジック？

「役者が揃ったから始めるぞ」

ぼんと手を打つようにしてどこか舌っ足らずな声が始告
げた。赤ん坊だ、にっと口角をあげる。

「はじめると」

申し合わせたわけもなく発言が被る。雪男は、ちらりと燐を
見てから譲ってもらおうというように言葉が続けた。

「どういうことですか、任務でなければ僕たちは何をす
るって言うんです？」

「説明する」

声は子供っぽい、のに逆らえない何かをふくんでいる。その
辺りとか燐のこれまで知ったどの赤ん坊とも違っていた、まず
落ち着き払っている態度、まるきり幼子の姿なのにそれに合
わない貫禄がじわっと出ている。存在感があつて、相当に気を入
れ腰を据えないと子守も満足に出来ないといった感じだ。応対に
戸惑うから、世の中にはこんな赤ん坊もいるというカタログの
ひとつに入れるところからはじめるべきだろう、うん。

「リポーンはやると思ったら本当にやるから、諦めるとい
うか……覚悟して」

「は？」

ツナだ、雪男とで思わず見えてしまう、声は小さかったけど語
調は強かった。雪男は、躊躇うようにツナを見る、彼はこちら
を子供と侮ったような物言いもしないし、本心であることも目

で分かる。

「僕は……」言葉を探しているみたいだ。

ふっと、今度はスリッパでないものが雪男と燐の目線ぎりぎ
りの高さを通り抜けていった。見たことのない悪魔だ。魍魎の
ようでもあるが、漂うのでなく、目的めがけて跳ねる小動物と
いう感じだ。

「……」

「なっ……」

どこから沸いたのか、小鬼が口を開けてリポーンの背後に迫
ろうとしていた、シユラは胸元から剣を取り出し、雪男は銃を
構える。燐は慌ててツナの腕を引く。悪魔が雲雀とリポーンに
向かっていた。ヴァチカン本部の結界についてなど燐は知らな
い、そもそも正十字騎士団の本拠地で観光名所だ、正十字学園
町のように適度に悪質なのは居てしまうのだろう。

雪男が放り投げて撃ち抜いた聖水、目覚めたシユラの魔剣が
目の前の空気を裂くかのように払われる。別に燐はスローモ
ーションで見てゐるのではない、けれども悪魔など知らないはず
の彼らは祓魔師と同じくらいの俊敏さで動いた。しかし、弾け
て分裂するのか、その悪魔は傲然と沸く。背中を向ける観光客
の肩にぶち当たったり、頭上をすつ飛びながら、牙を剥いて目
指すのは燐でもなくリポーンだ。

「……」

咳払いのような声。思わず息を呑む。

ガッ……

ゴン。

広場に高らかな音がした。誰かの手元から上空へと抜けるか
のように。

「え……？」

燐はツナの手を背後に庇うようにして引つ張ったまま、悪魔